

平和の詩「今、平和は問いかける」

私立つくば開成国際高校 3年 平安名 秋

夏六月 溶けかけたアイスを手走り出す 緑萌ゆるこの島の屋下がり

礎に刻まれた「兄」に まるであの日のように そっと触れるおばあ涙は

陽炎が登る摩文仁の丘に ただ果てしなく広がっていく

その涙は体を包み込み 私を「あの日」へといざなう 限りないこの空は

何を覚えているのだろう 涙に満ちたおばあ瞳は

何を語りかけているのだろう 七十八年前の あの日 あの時

かけがえのない たったひとつの命が 憎しみと悲しみの中で 散っていった

名も無き赤子の 微かな 微かな泣き声は 震える母の手によって

冷たく光の無いガマの中で 儚く消えていった

幾多もの砲弾が 紺碧の海を黒く染める鉄の嵐となって この島に降り注いだ

戦争が起きる前 そこには日常があった 私達と同じように

原っぱを駆け回り 友達とおしゃべりをする みんなで暖かいご飯を食べ

時には泣き 時には笑い 時には「ありがとう」を伝える

そんな今と変わらない日常が 平和が そこにはあった

平和は不確かだ 脆く崩れやすい いつもすぐそばにあるのに

いつのまにか消えていく おばあ涙は

摩文仁の丘に永遠(とわ)に灯る平和の火は 今、私達に問いかける

平和とは何かを 私達に出来ることは何かを 私は過去から学び

そして未来へと語り継いでいきたい おばあの涙を 沖縄の想いを

かけがえのない人達を 決して失いたくはないから 今日時間も過ぎていく

いつもと変わらずに 先人達が紡いできた平和を 次は私達が紡いでいこう

そして世界に届けていきたい 平和を創り 守っていく

この沖縄の「チムグクル」を